

# ヘーゲルの推理論 (三)

尼 寺 義 弘

はじめに

A 定有の推理

a 推理の第一格「E—B—A」

……以上

『阪南論集』人文・自然科学編第二六巻、第三号、一九九一年。

b 推理の第二格「B—E—A」

c 推理の第三格「E—A—B」

d 推理の第四格「A—A—A」

定有の推理のまとめ

……以上

『阪南論集』人文・自然科学編第二六巻、第四号、一九九一年。

B 反省の推理

……以下

本号

a 全称性の推理「E—B—A」

b 帰納の推理「A—E—B」

c 類比的推理「E—A—B」

反省の推理のまとめ

C 必然性の推理

a 定言推理「E—B—A」

推理論のまとめ

b 仮言推理「A—E—B」

c 選言推理「E—A—B」

B 反省の推理

ヘーゲルは、すでにみたように、定有の推理のもつ「矛盾」<sup>(1)</sup>から反省の推理へと推理論を展開する。<sup>注</sup> 反省の推理において、質<sup>2</sup>推理の各名辞がもっていた抽象性や個別性が「止揚」され、各名辞相互の「映現」や「必然的關係」が定立される。各規定性はこうして「具体的な」<sup>(2)</sup>意味をもつことになる。

注 定有の推理が反省の推理へ「弁証法」<sup>(3)</sup>的に移行するこの進行の仕方は、ヘーゲル独自の思弁であり、不可能なことである。この移行は認識の深化の過程としてとらえねばならない。つまり反省の推理は定有の推理のもつ対象把握の制限性をこえる推理として位置づけられる。かくしてこの進行は認識論的思考の過程として論究されねばならない。

反省の推理「B—E—A」の媒辞は、この移行によって、定有の推理のそのように、抽象的な直接性や個別性あるいは両項の単な

る外面的な共通性を表わすという意味を失っている。媒辞は両項の最初の「定立された統一」、「反省の統一」<sup>(4)</sup>、「同時に普遍性として規定されている個別性」<sup>(5)</sup>である。そして両項は反省の判断の形式をとり、個別と普遍(類)との「相関関係」がテーマとされる。

かくして「媒辞は(1)個別性を、(2)しかし普遍性にまで拡大したすべてのものとしての個別性を、(3)個別性と抽象的普遍性とを全く自己のうちに統一しているところの、根底にある普遍性、すなわち類を含んでいる。——反省の推理はこういう仕方ではじめて形式の本来の規定性をもつ。というのは、媒辞が規定の全体性として定立されるからである。」<sup>(6)</sup>

反省の推理において、このように、媒辞が抽象的なものではなくて諸規定の「全体性・「類」であり、概念の諸契機が「定立」されることになる。だが、媒辞は「反省の統一」であるけれども最初の段階のそれであり、「概念の絶対的同一性」<sup>(7)</sup>にはいまだ到っていない。つまり有機的連関をとらえる概念的把握(ein Begreifen)ではなくて、一般的関係をみる「総括(ein Befassen)」<sup>(8)</sup>である。すなわち「定立された統一」といっても、それは否定の否定ではなくて、単なる否定あるいは最初の否定である。ここに定有の推理から必然性の推理への中間段階として反省の推理が位置づけられる。

反省の推理は、a 全称性の推理、b 帰納の推理、c 類比の推理と展開される。つぎに各推理をみることにしよう。

## 注

(1) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 376. 『大論理学』下巻、

一五五頁。

(2) Ebenda, S. 380. 同書一五九頁。

(3) Ebenda, S. 354. 同書一三一頁。

(4) Ebenda, S. 380. 同書一五九頁。

(5) Hegel, Enzyklopädie, I, S. 341. 『小論理学』下巻、一七〇頁。

(6) (7) (8) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 380-381.

『大論理学』下巻、一五九—一六〇頁。

## a 全称性の推理「E—B—A」

全称性の推理は、悟性推理のもつ偶然性という「欠陥」を克服する推理であり、「完全性」の形式をもつ。たとえば、

「すべて金属は電導体である、(銅は金属である)」——( )内は引用者——、ゆえにたとえば銅もそうである」<sup>(1)</sup>。

ヘーゲルによれば、この推理の媒辞は両項の「定立された統一」を媒介する「具体的な特殊性」<sup>(2)</sup>である。だが、この媒辞は統一への始まりであり、反省の推理のなかでは最も貧寒な段階にある。すなわち媒辞は個別を普遍的なかにいまだ溶解しきっていない。つまり単なる否定であり、「否定の否定」、「自己への絶対的反省」<sup>(3)</sup>にまだ到達していない。個別のもつ直接性はそのまま現存している。それは「反省の外的普遍性」のもとに取り込まれているにすぎず、「概念の普遍性」<sup>(4)</sup>に達してはいない。つまり定有の推理のもつ一面を残しているのである。

定有の推理の媒辞は、すでにみたように、「具体的な主語」のもつ多くの質のうちの一つの質を抜き出したものであり、その媒辞を

介して結合される結論は偶然的なものであった。なぜなら同じ主語が異なる質を媒辞として正反対の結論も得られうるからである。

ところで、全称性の推理では「媒辞は、いまや個別性を含み、そのことによってそれ自身具体的であるから、この媒辞を介して、具体的なものとしての主語に属するただ一個の述語が主語と結合される<sup>(5)</sup>」。

このように全称性の推理の媒辞は、単なる「抽象」ではなくて、「一個の具体的なもの」であり、「全称性の規定」すなわち「すべてのもの (Alle)」をもつ。この推理の主語は、たとえば、

「すべての緑色のもの、あるいは、すべての規則正しいものは楽しい<sup>(6)</sup>」という命題のそのように、その属性をもつところの「すべての現実的な具体的対象」である。この具体的なものの全体に属する述語「楽しい」が、媒辞のもつ全称性の規定「すべて」によって主語と結合される。すなわち同じ属性をもつ「すべてのもの」がはじめから前提されている。したがってこの推理は「完全な」推理の様相を呈しているが、しかしよく分析すると「手品」であることがわかる。すなわちヘーゲルは完全性の推理の形式を充足するつぎの例を再び取り上げている。

すべての人間は死す、  
 ところ、ガイウスは一人の人間である、  
 故にガイウスは死す、<sup>注</sup>

注 この推理は定有の推理の第一格で出された例と同じ推理である。し

かし、この例は、小前提の文章全体がイタリックで強調されており、「ところ」(Num)が入っている。また結論の "Alto" が "Ergo" となり、「(P)ンクト」が「(C)ンマ」となっている。

この推理の媒辞「すべて」は、ヘーゲルによれば、「すべての個別」のことである。だから媒辞はすでに直接に結論となる述語「死す」を含んでいる。かくしてこの推理は、「推理によって始めてこの述語を得たわけではない。」つまり「大前提はすでにそれ自身のうちに結論を含んでいるのである。だから大前提はそれ自身で正しいのではない。」「結論が正しいがゆえに、またその限りにおいて大前提も正しいにすぎない<sup>(8)</sup>」のである。かくして先の例では、「銅そのもの」や「ガイウス個人」についての命題が正しいものであることがはじめに証明されていなければならないのである。

注 ヘーゲルはこの種の推理について、すでに定有の推理で、「このような推理がたどられるのを聞くと、人はすぐに退屈におそわれる」と述べ、それがこの推理のもつ「無用な形式<sup>(9)</sup>」からくるとしている。さらに『小論理学』では、「かような推理をみると、誰でもそれが単に衡学的であるだけでなく、無意味な形式主義であると感ずるのは当然である<sup>(10)</sup>」と述べている。

全称性の推理の分析は、大前提それ自体が推理にもとづかないで、個別と普遍との結合を、すなわち結論を前提するということを明らかにしたものとした。かくしてこの推理の真理性は、つぎにみる、それぞれの個別の枚挙から結論を導く帰納の推理で根拠づけられることになる。すなわち全称性の推理は自己のよってたつ根拠へと遡及し、自己の根源を明らかにする推理へと移行していくのである。

注

- (1) Hegel, Enzyklopädie, I, S. 341-342. 『小論理学』下巻、一七一頁。  
 (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 381-383. 『大論理学』下巻、一六〇—一六二頁。  
 (9) Blenda, S. 358. 同書、一三五頁。  
 (10) Hegel, Enzyklopädie, I, S. 342. 『小論理学』下巻、一七二頁。

## b 帰納の推理「A—E—B」

帰納の推理は全称性の推理の欠陥を克服する推理である。帰納の推理は定有の推理の第二格、A—E—B の範式をとり、個別性を媒辞とする。『小論理学』ではつぎの例をあげている。

金は金属である、銀は金属である。銅、鉛、等々も  
 そうである。

……大前提

すべてのこれらの物体は電導体である。

……小前提

(ゆえに) すべての金属は電導体である。

……結論

この推理では「全称性としての個別性」<sup>(1)</sup>が両項を連結する媒辞の役割を果たしている。この個別性は抽象的なそれではなくて、「完全なものとしての個別性」、「普遍性という意味をもつ個別性」<sup>(2)</sup>である。

注 帰納の推理の媒辞は、第二格のそれと同じ「個別」であるが、意味は異なっている。第二格では、すでにみたように、A—E (普遍は個別である)において、EはAを包摂するものではなかった。すなわち述語とはなりえないという欠陥をもっていた。そのため範式として不十分なものであった。<sup>(3)</sup>帰納の推理の媒辞は、「個別に対立する規定」である類という意

味をもつ個別性であり、この不充足性は解決される。

四

この推理の「一方の項はこれらすべての個別に共通する何らかの述語」(伝導体——金属の一つの属性)である。述語の個別に対する関係が前提となる。「他方の項は直接的な類」(金属)である。「この類は媒辞としての個別の全部、または媒辞の種の全部をあげつくすことによって充足される」<sup>(4)</sup>。かくしてこの推理はつぎのような形式をとる。

B  
 —  
 e e e ↓ 無限に

A —

注 『小論理学』では、右の図のAとBの位置が逆である。<sup>(5)</sup>

右の例にみるように、帰納の推理は「多くの個別を類のなかへ主観的に綜合する推理」であり、そしてまた「類のある普遍的規定性と結合する推理」<sup>(6)</sup>でもある。帰納の推理はかくして「単なる知覚」あるいは「偶然的定有」の推理ではなく「経験の推理」である。だが、本質的にはいまだ必然性のない「主観的な推理」であるといえる。すなわち媒辞の「個別性は普遍性と同一のもの」とされるが、単に「外延」を同じくするにすぎない。個別はやはり「直接性」のある個別の意味を保っている。すなわち「全称性によるこれらの個

別の類への総括は外的反省<sup>(7)</sup>にとどまる。したがってAとEとの統一は「同等性の統一」であり、真の同一性はえられてはいない。両項の統一は「果しなき当為にすぎない」。a、b、c、d……と経験の「無限なもの」への進行において類を形成するが、この過程は「悪無限性への累進」であり、すべてをつくすことはできない。<sup>注I</sup> 帰納法の結論はかくして「蓋然的」であるといえる。<sup>注II</sup>

注I 帰納の推理のもつ限界は、マルクスが全体的価値形態の「欠陥」としてあげているつぎの文章を想起させる。

「第一に、リンネルの相対的価値表現は未完成である。というのは、その表示系列は完結することがないからである。」<sup>(9)</sup>つまり新たな商品が登場することによってそれはいくらでも延長されるのである。

注II 『小論理学』は帰納法の不完全性についてつぎのように述べている。帰納の推理の媒辞は「全称性としての個別性」つまり「完全に枚挙された個別」である。これは「一定の領域で観察および経験が完全に行われていることを前提する。しかし取扱われるものが個別性であるから、ここには再び無限進行(個、個、個……)が生じる。帰納においてははけつして個別性を余すところなく汲みつくすことはできない。……帰納はしたがって不完全なものである。人はあれこれの観察、否多くの観察をしたであろうが、すべての場合、すべての個々のものを観察したのではない。帰納のこうした欠陥は類比の推理へと導く」<sup>(10)</sup>。

帰納の推理は、このように、一つ一つの事実の積み上げと類による統一、すなわち「知覚が経験となるための無限なものへの」<sup>(11)</sup>進展といえる。帰納の推理は経験の無限進行ということから、全称性の推理と同様に、「結論を直接的なものとして前提している」。かくして

帰納の推理にもとづく経験は「如何なる反証も挙げられない」「妥当なもの」<sup>(12)</sup>であることが仮定される。

ところで、ヘーゲルによれば、帰納の推理の媒辞は個別性であるが、それは直接的なあるいは有的な個別性ではなくて、「普遍的な直接性」、「普遍性と直接に同一」のものの、したがって「客観的な普遍性、類」<sup>(13)</sup>であるべきである。しかし、すでに見たように、個別と普遍との真の同一性はいまだ得られてはいない。かくして帰納の推理はその真理性をつぎにみる類比の推理において明らかにされることになるのである。<sup>注</sup>

注 ヘーゲルは帰納の推理を、各々の推理と同様に、究極の目的である完全な有機性へ移行するための一つの発展段階として位置づけている。それゆえに概念規定は、それが進行のたびに有機的な意味を担うようになるとともに、またそれに応じて一歩ずつ不明確となっていくように思われる。たとえば媒辞の「個別性」がもつ「直接性」、「外面的なもの」と「普遍性」、「内面的なもの」<sup>(14)</sup>との両義的な意味内容である。さらに全称性の推理と帰納の推理の媒辞の位置づけが互いに不明確であるといえる。

われわれはこの推理についても現実の具体的な発展過程と認識の深化の過程と概念的思考の過程とを厳密に区別して論じなければならぬことを重ねて強調しておきたい。この三者の常なる混同・同一視がヘーゲルの悪しき思弁性を形成してきたのである。

なおレーニンの述べた周知の「ヘーゲルの『論理学』の全体をよく研究し理解しなければ、マルクスの『資本論』、とくにその第一章を理解することはできない」<sup>(15)</sup>は、帰納の推理から類比の推理への移行にあたるこの個所にある。帰納の推理の意義と限界については、簡単ではあるが、F・エングелスの「自然弁証法」<sup>(16)</sup>も参照されたい。

注

- (1) Hegel, Enzyklopädie, I, S. 342. 『小論理学』下巻 一七二頁。
- (2) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 384. 『大論理学』下巻 一六四頁。
- (3) Ebdenda, S. 366-368. 同書 一四四—一四六頁。
- (4) Ebdenda, S. 384. 同書 一六四頁。
- (5) Hegel, Enzyklopädie, I, S. 342. 『小論理学』一七二頁。
- (6) (7) (8) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 384-386. 『大論理学』上巻 一六四—一六六頁。
- (9) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, 1. Aufl., S. 778.
- (10) Hegel, Enzyklopädie, I, S. 342-343. 『小論理学』下巻 一七二—一七三頁。
- (11) (12) (13) (14) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 386-387. 『大論理学』下巻 一六六頁。
- (15) W. I. Lenin, Konспект zu Hegels „Wissenschaft der Logik,“ In: W. I. Lenin Werke, Bd. 38, S. 170. 『哲学ノート』第一分冊 一五七頁。
- (16) Vgl.: F. Engels, Dialektik der Natur, M.-E.-W., Bd. 20, Berlin 1962, S. 494 ff.

### c 類比の推理「E—A—B」

類比の推理は、帰納の推理の欠陥を解決する推理であり、定有の推理の第三格、E—A—B の範式をとる。媒辞は普遍であるが、それは抽象的普遍ではなくて、さきにみた帰納の推理の結果として、個別的なもの・「具体的なもの」の本<sub>本</sub>性であるところの普遍性<sup>(1)</sup>である。ヘーゲルはつぎの例をあげている。

地球は住民をもつ、

……………大前提

月は一つの地球である、  
……………小前提  
故に月は住民をもつ。  
……………結論

この推理の媒辞は「地球」という具体的なものである。「地球」はここでは個別であるとともに普遍(類)として位置づけられている。この例にみられるように類比の推理の大前提は「二、三の徴表において或る客体に類似するものは、他の徴表においてもその客体に類似する」<sup>(2)</sup>あるいは「二つの対象が一つ、または二、三の性質において一致するときは、一方のものには他方のものもがつ、もう一つ別の性質も属する」<sup>(3)</sup>と言えるであろう。<sup>注</sup>

注 『小論理学』はつぎのように述べている。

「類比の推理においては、一定の類に属する事物が一定の性質を持つということから、同じ類に属する他の事物もまた同じ性質を持つことが推理される。たとえば「人々はこれまでにあらゆる遊星においてこうした運動法則を見出した。ゆえに新しく発見される遊星も、おそらく同じ法則にしたがって運動するであろう」と言うとき、これは類比の推理である。類比が経験科学において非常に重んじられているのは当然であり、またこの方法によって非常に重要な成果が達成されている。類比は理性の本能であって、それは、経験的に見出される個々の規定が事物の内的な本性あるいは類にもとづいてあることを予感させるものであり、さらにこの上に立脚しているのである。」<sup>(4)</sup>

レーニンも「類比——推定(科学的予見)」<sup>(5)</sup>としている。

ところで、二つの個別がそこで合一するものとしての普遍は、類比の推理では「一つの単なる質」である。その質が主観による「徴表」あるいは「経験的な内容」とされ、したがって「両者の同一性

が単なる類似性とされると、この推理はそれだけ皮相なものとなる<sup>(6)</sup>注。

注 『小論理学』では、この「皮相性」についてつぎのように述べられている。「地球は天体であって住民をもっている、月も天体である、ゆえに月にもまた住民が住んでいるであろう。この例は、「ガイウスという人間は学者である、テイトウスもまた人間である、ゆえに彼もまた学者であろう」と同様の、「拙劣な」、「皮相な」類比として拒否されている。すなわち「空虚な外面的な類比をもってする無意味な遊戯にすぎない」のである。

さらにヘーゲルは類比の推理の欠陥についてつぎのように述べている。

「地球が天体一般として住民をもつか、それとただ一定の特殊な天体としてのみ住民をもつかは不明である。——個別性と普遍性とは、このような媒辞の中で直接的に結びつけられているかぎり、類比はまだやはり反省の一推論である。つまり、この直接性のために、反省の統一のもつ外面性がなお存在している。すなわち個別は単に即自的に類であるにとどまり、個別の規定性を類自身の規定性とするような否定性によって定立されてはいない。そのために、一方の個別と他方の個別との両者は同じ類に所属するものであるにもかかわらず、媒辞の一方の個別に属する述語は、必ずしも他方の個別の述語となるとは限らないのである。」<sup>(8)</sup>

媒辞である地球は普遍の位置にあるが、この推理の欠陥は、普遍と個別とが同一のものとして統一されていないことである。つまり

普遍(類) ≡ 個別 として完全に合致することもあれば、合致しないこともあるという不確実性である。

ところで類比の推理、 $E-A-B$  の  $E-B$  (月は住民をもつ) は結論である。しかし前提である「地球は住民をもつ」もまた  $E-B$  である。したがってこの推理は前提もまた結論であるという「要求」<sup>(9)</sup>をもっている。つまり全称性の推理および帰納の推理と同様に、「結論を前提している」といえる。かくしてこの欠陥を克服する新たな推理へと移行しなければならない。

#### 注

- (1) (2) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 387. 『大論理学』下巻、一六七—一六八頁。
- (3) Ebenda, S. 388-389. 同書一六九頁。
- (4) Hegel, Enzyklopädie, I, S. 343. 『小論理学』下巻、一七三頁。
- (5) W. I. Lenin, Konsept zu Hegels „Wissenschaft der Logik“, a. a. O. S. 170. ノーニン『哲学ノート』第一分冊、一五七頁。
- (6) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 387-388. 『大論理学』下巻、一六七—一六八頁。
- (7) Hegel, Enzyklopädie, I, S. 343. 『小論理学』下巻、一七三—一七四頁。
- (8) (9) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 389-390. 『大論理学』下巻、一七〇頁。

#### 反省の推理のまとめ

定有の推理は、すでに諸格の説明でみたように、自分の前提の根拠を他の定有の推理にもっていた。たとえば第一格は、その前提

をなす大前提と小前提との証明を第二・第三格に依存しており、したがって各格が相互に前提しあう関係にあることが示された。反省の推論においては、自分の前提の根拠は各推理それ自体のなかに「移される」<sup>(1)</sup>。つまり同じ推理のなかで一方の規定は他方の規定において互いに「定立」されることになる。ヘーゲルは反省の各推理に共通する、この前提そのものが結論であるという論理を媒辞のもつ直接性あるいは個別性の「最初の否定」ととらえる。さらにこの否定は、つぎにみる必然性の推理で開花することになる「第二の否定」<sup>(2)</sup>。つまり否定の否定によって止揚される。すなわち媒辞ははじめの直接性の否定Ⅱ「外面的な反省の普遍性」の定立であり、つぎにその否定Ⅱ「即自向自的に存在する普遍性」<sup>(3)</sup>・「客観的な普遍」・「類」の定立であり、同時にそれはさきにみた結論Ⅱ前提Ⅱ媒介という同一性の高次における定立である。この過程をおし進めるものこそ直接性あるいは個別性を止揚し、普遍・特殊・個別の完全な統一をえようとする概念それ自体の「媒介の要求」<sup>(4)</sup>である。<sup>注</sup>

<sup>注</sup> 類比の推論においてもヘーゲルはこの推理のもつ意義と限界をたえず意識している。そして帰納の推理からの発展と必然性の推理への移行というダイナミックな自己展開の論理を試みている。しかし問題は概念からの自己展開という思弁的な方法がつねにまとい付いて離れないことである。つまりさきの結論Ⅱ前提Ⅱ媒介とする概念的展開の論理は、類比の推理それ自体から必然性の推理へ何としても移行しなければならない哲学的思弁の世界にのみ適用するものであろう。

右のような思弁的な把握ではなくて、類比の推理のもつ積極的な意義と不充分性を指摘し、その不充分性を解決する新たな推理を指示することによってこの推理はとらえられたことになるであろう。

反省の推理の媒辞は、全称性の推理→帰納の推理→類比の推理へとその展開が進むにつれて、「外面的形式規定」(共通性)→「無数の個別」の枚挙→「本質的普遍性」へと展開され、個別と普遍との結合関係が一層緊密となり、より完全な推理へと発展する。反省の推理「B—E—A」の媒辞である個別は、このようにして、その直接性が止揚され、「即自向自的に存在する普遍性」として規定されると、推理は必然性の推理「E—A—B」に移行する。

<sup>注</sup>

(1)・(2)・(3)・(4) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 390-391. 「大論理学」下巻 一七〇—一七一頁。

### C 必然性の推理

必然性の推理は、定有の推理および反省の推理を自己の必然的な前提としており、両推理の不充分性を解決する、「内容にみちた」<sup>(1)</sup>完全な推理である。この推理の媒辞は普遍であるが、「自己において本質的に規定されているものとして定立されている」<sup>(2)</sup>。それは定有の推理の媒辞のもつ「単純な規定的な普遍性」(特殊性)と反省の推理の媒辞のもつ「客観的な普遍性」(個別性)との統一である。「つまり、それは一つの充実した、しかも単純な普遍性であり、事物の普遍的な本性、すなわち類である」<sup>(3)</sup>。かくして推理論全体の媒辞の展開は、単純で「抽象的な」もの→「規定的な区別」→「単純な同一性」への復帰である。

必然性の推理の両項は媒辞のなかで自己反省し、媒辞のなかでそ



の「内的同一性」をもつ。「媒辞の内容規定は両項の形式規定」<sup>(4)</sup>であり、各名辞は一つの必然的な契機をなしている。ここに形式と内容との一致がえられる。必然性の推理は、定言推理→仮言推理→選言推理 として展開される。

## 注

(1) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 391. 『大論理学』下巻、一七二頁。

(2) Hegel, Enzyklopädie, I, S. 343-344. 『小論理学』上巻、一七四頁。

(3)、(4) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 391-392. 『大論理学』下巻、一七二頁。

## a 定言推理「E—B—A」

定言推理は必然性の推理の最初の、直接的な段階にある推理であり、「E—B—A」という範式をとる。特殊が媒介するものであるが、「この特殊は規定された類あるいは種<sup>(1)</sup>という意味」をもっている。定言推理は定言判断を前提とする。媒辞はしたがって「客観的普遍性」である。「主語はその実体によって述語と結合される」<sup>(2)</sup>。この実体は本質論の「実体と偶有」<sup>(3)</sup>の関係のそれではなくて、概念における普遍・「即自向自的に定立された普遍」である。したがって「実体の区別は推理の両項」、「普遍性と個別性」である。しかしながらこの推理は必然性の推理の最初の段階にあるため、推理の一方の項をなす普遍性はいまだ抽象的普遍性であり、「実体の偶有性」の総括されたものである。他方の項である個別性は、「現実的なも

の」、「類と規定性との具体的統一」であるが、なお直接的な個別性の意味をもつ「偶有性」である。両項の「媒辞に対する関係は定言判断の形式」をとっている。つまりこの推理は「実体の本質的別区」あるいは「類の種差」<sup>(4)</sup>に対して直接性あるいは偶有性がなおつけ加わったものといえる。たとえばつぎの推理をみることにしよう。<sup>(5)</sup>

金は金属である、

諸金属は諸エレメントである、

故に金属としての金はエレメントである。

この推理の媒辞は「金属」である。金属は「個別の本質的な本性」である。したがってこの推理は普遍的実体を媒介とするものである。だからここには定有の推理にみられた偶然性もなくなっており、さらに反省の推理のように結論をはじめから前提するということもない。

定言推理には「三つの名辞を貫く一つの本質」<sup>(6)</sup>（実体的内容）があり、個別性・特殊性・普遍性はこの本質の「形式的な契機」をなしている。かくして定言推理においては、各名辞を貫く同一性にもかかわらず「客観性」が現れはじめており、この推理は偶然的なもの、主観的なものではなくなる。媒辞は両項の「内容の充実した同一性」、「実体的普遍性」、「類」であり、両項も同じ類に属しながら「自立性」をもち、この同じ媒辞（概念）に含まれる。

しかし両項の媒辞に対する関係は、概念的把握のレベルにはいまだ達していない。それはなお「無関心な」側面、「主観的な面」を残している。すなわち右の同一性は「実体的な同一性」、「内容」とどまるものであって「形式の同一性」としては定立されていない。つまり内容と形式との必然的連関としてはとらえられていない。かくして「概念の同一性は内的紐帯」にとどまり、それは顕現せず、隠されているのである。ここに定言推理の限界があるといえる。

定言推理のもつ「偶然性」は、個別が「客観的普遍性」(類)としての媒辞に関係づけられる仕方にある。すなわち金はエレメントである、と言えるが、逆に、エレメントは金である、とは言えない。その意味での偶然性あるいは「無関心性」がこの推理にはなお残存する。つまり各名辞を貫く一つの実体的本質(類)はあるが、個別は類によって完全に媒介されていない面がある。個別は無数にある多くの個別の一つであり、類と個々の個別は相互媒介の関係にはない。両項は一方で「即・自・的」に客観的普遍性、「自立的本性」という面をもつが、同時に他方で「直接的なもの」、「互いに無関心な現実性」、「偶然的な」という面をもっている。つまり両項は媒辞の同一性のなかで止揚されるが、しかしこの同一性は「単に形式的で、内的な同一性」にすぎない。かくして定言推理はこの不充分性が解決される仮言推理へと移行する。

## 注

- (1) Hegel, Enzyklopädie, I, S. 344. 『小論理学』下巻、一七四頁。

- (2) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 392. 『大論理学』下巻、一七三頁。  
 (3) Ebenda, S. 219-222. 『大論理学』中巻、二四七―二五一頁。  
 (4) Ebenda, S. 392-393. 『大論理学』下巻、一七三頁。  
 (5) G. R. G. Mure, A Study of Hegel's Logik, Oxford University Press, 1950. P. 220.  
 (6) (7) (8) (9) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 393-395. 『大論理学』下巻、一七四―一七五頁。

## b 仮言推理 「A—E—B」

仮言推理は仮言判断を前提する。仮言判断は二つの規定の「必然的な連関」を表現する。すなわち、「もしAがあるなら、Bがある。」あるいは、「Aの有はA自身の有ではなくて、ある他者の、Bの有である。」しかしまだAあるいはAの有があるということは言われていない。仮言推理はこの判断にAのあるいはAの「有の直接性」(媒辞)を小前提としてつけ加える。かくしてこの推理はつぎのとおりである。

もしAがあるなら、Bがある、  
 ところでAはある、  
 故にBがある。

仮言判断は定言判断を前提しており、その根底には「内的な実体的・同一性」の関係がある。だから仮言判断の両項は「直接的な有」ではなくて、「必然性のもとにある有」、「止揚された有」である。

それゆえ両項は「普遍性および個別性」<sup>(3)</sup>として互いに制約関係にある。推理においてこの「制約」が現実性として現れるためには、右の推理におけるように、「一つの個別性のなかに総括される有」(媒辞)が必要である。かくしてこの推理ははじめて「統一と意味」を獲得し、「一つの普遍妥当な定有」<sup>(4)</sup>を結論として得ることとなる。

注 『小論理学』では、仮言推理「A—E—B」の媒辞(E)は「媒介するものでもあれば、媒介されるものでもある」という意味をもつ「直接的な有」<sup>(5)</sup>であるとしている。

ところで、制約者と被制約者との「相関関係」は、すでに本質論で取り上げられているが、その「普遍的な」関係は仮言判断と仮言推理に一層よく「照応する」。さきに例示した推理の媒辞であるAは「直接的な有」であるとともに「媒介する有」、<sup>(6)</sup>「概念のうちにある有」<sup>(6)</sup>である。「この媒辞は客観的普遍性または同一の内容の全体性と無関心な直接性との矛盾」<sup>(7)</sup>をもち、「否定性」、「媒介するもの」、「概念の自由な統一」、「活動性」として現れる。この矛盾は結論「故にBがある」において表現される。つまりBは自己自身に存在の根拠をもつものではなくて、他のものによって「媒介された」ものであることが明らかである。仮言推理は定言推理の不充分性を解決する推理であるが、いまだ自己の有を自己自身で媒介する原理は備えていないのである。

ところで、表象からみてAとBという相互に他者としての関係が、実は相関関係であり、さらには自己自身の必然的關係であることが

明らかとなる。かくしてこの関係において「媒介するものと媒介されるものとの同一性が存在する」<sup>(8)</sup>こととなる。この関係の完成がつきにみる選言推理である。すなわち推理の媒辞は「自己を区別するものであるとともにこの区別から自己を取り戻して自己のなかに総合する同一性」<sup>(9)</sup>となる。

(1) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 337. 『大論理学』下巻、一一一頁。

(2) (3) (4) Ebenda, S. 395-396. 同書、一七六—一七七頁。

(5) Hegel, Enzyklopädie, I, S. 344. 『小論理学』下巻、一七四頁。

(6) (7) (8) (9) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 396-398. 『大論理学』下巻、一七七一—一七九頁。

### c 選言推理 「E—A—B」

選言推理は仮言推理の真理であり、仮言推理の欠陥を解決する完全な推理である。選言推理において「媒介するものと媒介されるもの」との統一が定立される。選言推理の媒辞は「形式によって充足された普遍性」、「全体性」、「展開された客観的普遍性」<sup>(1)</sup>である。それゆえこの媒辞は「普遍性」であるとともに「特殊性」および「個別性」でもある。すなわち媒辞は普遍性として「類の実体的同一性」でもあり、さらにその「特殊化の全体」でもある。つまり「諸々の種に分けられた類」<sup>(2)</sup>である。<sup>注</sup>

注 『小論理学』では選言推理についてつぎのように述べられている。「媒介する普遍がまたその特殊化の全体、個々の特殊、排他的な個別性と

して定立されている。「選言推理」の諸規定においては、同一の普遍がただ区別の諸形式においてのみ存在している。<sup>(3)</sup>

ここで選言推理の根底をなす選言判断についてみておこう。選言判断はつぎの形式で表現される。

「AはBであるとともに、またCでもあり、またDでもある」。

(同一の側面—Sowohl—Als—)——( )内は引用者、以下同様——  
「AはBであるか、Cであるか、Dであるかである」。(区別の側面—Entweder—Oder—)

この判断において主語概念をなす類は同一と区別との統一として定立される。区別の側面は諸規定の「否定的統一」、「互いの排斥」であり、「他の個別性の排斥を伴う個別性としての特殊である」。<sup>(4)注</sup>

注 選言判断は初版『資本論』の価値形態のつぎの一文を想起させる。

「リンネルがその価値を上着で表現するとともに、コーヒーでもその他のものでも表現し、この商品でか、それともあの商品でか、それともまた第三の商品、等々でか表現する、とどうことである」。<sup>(5)</sup>

選言判断は同一「Sowohl—Als」や区別「Entweder—Oder」との統一であり、初版『資本論』「本文」も右のように表現している。しかし「初版」付録以降は区別の側面「Entweder—Oder」でのみ表現されている。

ところで、区別の「排斥」の問題は、形態Ⅱの等価形態の欠陥に生かされている。

「各個別の商品種類の自然形態が、ここでは、無数の他の特殊な等価形態とならんで一つの特殊な等価形態であるのだから、総じて、もっぱら、それぞれが互いに排斥し合う制限された等価形態があるだけである」。<sup>(6)</sup>

かくしてつぎの推理をうる。

AはBであるか、Cであるか、Dであるかである、  
ところがAはBである、

故にAはCでもなく、Dでもない。

あるいはまた

AはBであるか、Cであるか、Dであるかである、

ところがAはCでもなく、Dでもない、

故にAはBである。

Aは推理をなす三つの判断においていずれも「主語」をなし、第一前提では「普遍」であり、第二前提では「規定的なもの」、「一つの種」であり、結論では「排他的な、個別的規定性」である。あるいは後者の推理のように、Aは小前提においてすでに「排他的な個性」<sup>(7)</sup>として規定され、結論ではA本来のものとして定立される。かくして「仮言推理の真理であるところのもの、媒介するものと媒介されるものとの統一」<sup>(8)</sup>はここに定立される。媒辞は「概念の全体性」として「自分のなかに両項をその完全な規定性において含ん」でおり、両項は「被測定有」<sup>(9)</sup>、モメントに落とされる。

形式的推理のもつ「形式主義」や「主観性」<sup>(10)</sup>がここに止揚される。たとえば定有の推理の考察ですでにみたように、形式的推理は

「大前提」、「小前提」、「結論」から成立していた。両項およびそれと連結する媒辞も内的な統一を欠如させており、相互に外的な偶然的関係にすぎなかった。形式的推理論は、既述のとおり、選言推理へ到達するプロセスにおいて、普遍・特殊・個別からなる三項関係の必然性としてとらえられ、止揚される。選言推理はさらに全体の有機的連関を概念の諸モメントとして把握し、推理論は完結する。<sup>注</sup>

注 判断論では概念の判断が最高の判断として位置づけられ、概念と定有との完全な一致がえられる。推理論では判断論のような概念の推理論は存在しない。概念の推理論は客観に妥当する。客観は、機械論→化学論→目的論と展開されるが、この過程で推理論は実現されていく。<sup>(1)</sup>すなわち非有機的統一から有機的統一へと客観それ自体が発展していく。この過程は概念と定有との一致が実現されていく過程である。しかしこの過程は客観においてもいまだ達成されていない。理念ではじめて完成することとなる。

ヘーゲルは右のように述べるのであるが、選言推理をなす各命題は各々同じことを別の角度から述べているとみることができる。すなわち、

(一)、AはBであるか、Cであるか、Dであるかである。——Aは普遍であり、これらのうちのどれか一つである。

(二)、AはBである。——特定のBをあげて限定している。Aは特殊である。

(三)、AはCでもなく、Dでもない。——B以外のものすべてを排斥している。Aは個別である。

かくしてこの推理論において、Aは普遍でもあり、特殊でもあり、個別でもある。推理をなす各命題はここにすべてが同一である。したがって結論が前提より無条件に導き出され、媒介するものと媒介されるものとの統一がえられることになる。このようにヘーゲルは形式的な選言推理を自己自身の「普遍—特殊—個別」からなる有機的な推理論にあてはめて改造しているといえることができる。

注

(1) (2) Hegel, *Wissenschaft der Logik*, II, S. 398. 『大論理学』下巻 一八〇頁。

(3) Hegel, *Enzyklopädie*, I, S. 344. 『小論理学』下巻 一七四—一七五頁。

(4) Hegel, *Wissenschaft der Logik*, II, S. 398-399. 『大論理学』下巻 一八〇頁。

(5) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, 1. Aufl., S. 24.

(6) Ebenda, S. 778.

(7) (8) (9) Hegel, *Wissenschaft der Logik*, II, S. 399. 『大論理学』下巻 一八一頁。

(10) Ebenda, S. 400. 同書 一八二頁。

(11) ヘーゲルの目的論についてはつぎの文献を参照されたい。

両角英郎「ヘーゲルの目的論」『沖縄国際大学教養部紀要』第四巻、第四号、一九七七年。

### 推理論のまとめ

ヘーゲルの推理論は、以上みてきたように、選言推理において一応の完成をみる。定有の推理→反省の推理→必然性の推理という思考過程の鍵をなすものは媒辞にあるといつてよい。真なる媒辞

は、形式的推理のそれとは全く異なっていて、媒介するものと媒介されるものとの統一あるいは全体性を定立する。媒辞はまさにこの統一を志向する「要請としての概念」<sup>(1)</sup>、「当為としての概念」である。各段階における各々の推理、はこの要請あるいは当為の「充実ないしは具体化」<sup>(2)</sup>の一步一步の段階を表現している。<sup>注</sup>

注 「小論理学」では推理論の「一般的成果」としてつぎのように述べている。推理は真なる媒辞により、(1)推理全体をなす諸モメントの各々が「完き推理」である。(2)媒介と「媒介の止揚」により、「同一の普遍」が各諸形式を貫ぬいている。かくして推理は「主語を他のもの<sup>(3)</sup>ではなく、止揚された他のものと、すなわち自己自身と結合するもの」である。

定有の推理において、第一格から第四格までの諸格の関連によって推理の全体および相互の関係が明らかとされた。つまり諸格の全体が互いに「媒介の機能」を果たしているのである。反省の推理において、媒辞は両項の規定を経験や例示や比較などによって単に「外面的に結合する統一」として存在した。必然性の推理において、媒辞は「展開された、全体的な統一」となるとともに単純な統一<sup>(4)</sup>となる。推理の過程はかくして媒介運動とそれの止揚であるといえる。すなわち「推理の運動は、そこでは何ものも即自向自的には存在せず、各自は他のものの媒介によってのみ存在するというこの媒介性の止揚」<sup>(5)</sup>である。かくして推理の運動の結果として推理形式は止揚される。推理論はここに「直接性」<sup>(6)</sup>、「有」<sup>(7)</sup>、「媒介と同一のもの」<sup>(8)</sup>、「事物」<sup>(9)</sup>への高次の復帰となり、「客観性」へ移行する。

さて推理論全体を総括することしよう。概念↓判断↓推理と

いうヘーゲル概念論の展開は、概念(統一)↓概念の自己分裂(区別)↓再統一の過程である。つまり概念は判断において自己分化し、推理はこの自己分割を再び自己自身に取り戻す過程である。ヘーゲルは推理論の展開において、形式的推理や経験法則を援用しながら事物の有機性、発展性を把握しようとしている。とりわけ必然性の推理は媒介するものと媒介されるものとの統一の過程として位置づけられ、普遍・特殊・個別からなる概念の具体化として有機的連関や発生的展開の過程が明らかにされている。しかしながらこの過程は、くり返し述べたように、客観的實在の生成過程ではけっしてない。われわれは対象認識の深化の過程として、認識論的思考の歩みとして、ヘーゲルの生きている側面を考察してきた。推理論が難解な思弁の世界を超え出でて、対象認識の方法として位置づけられるならば、現実認識の有効なオルガノンとしての意義をもつであろう。<sup>(1)</sup>

## 注

- (1) (2) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 400. 『大論理学』下巻、一八二頁。
- (3) Hegel, Enzyklopädie, I, S. 344. 『小論理学』下巻、一七五頁。
- (4) (5) (6) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S. 400-401. 『大論理学』下巻、一八二―一八三頁。
- (7) ヘーゲルの「概念」を物質概念と関連させながら新たな視角より包括的に論じたものとしてつぎの文献があるので参照されたい。  
有尾善繁「ヘーゲル『論理学』における「概念」と物質概念」『阪南論集』人文・自然科学編、第二七巻、第一号、一九九一年。  
(一九九一年十月三日受理)